

～東北吹奏楽連盟における吹奏楽コンクールB部門の変遷について～

東北吹奏楽連盟

吹奏楽コンクール東北大会の中学校と高等学校において、東北では人数の上限により二つの部門を東北大会で開催していた。A部門はAクラス（50名以内）、B部門はBクラス（35名以内）、その他に上位大会が県大会までのCクラス（25名以内）であった。また、Cクラスを含む全てのクラスで課題曲と自由曲の演奏が課せられていた。Aクラスの各県代表は2団体、Bクラスの各県代表は1団体という激戦であった。東北大会の日程も全二日間で開催されていた。

その後、東北全体の更なる発展を願って理事会で話し合いがもたれた。そして、平成12年（2000年）から少しずつ部門を変化させ、平成14年（2002年）に東北大会を全四日間で開催することになった。全国大会を目指すA部門の各県代表を4団体として全24団体としB部門を一本化して「小編成の部」と名称変更して中学校・高等学校ともに25名以内で自由曲のみの演奏とした。

東北連盟では「中高の加盟団体に望むことは、吹奏楽コンクールには部員数が何人であろうと1団体でも多くA部門で参加してもらいたい。しかし、B部門廃止に伴い少人数団体の吹奏楽コンクール参加を考慮して、課題曲を演奏するのに楽器編成的難しい編成を検討した結果、全部員で25名以下の部門を設けることとして、自由曲のみの小編成部門を設ける」とした。小編成部門への各県代表は2団体として全12団体で東北大会を開催した。

当初の決定では小編成部門は東北大会止まりの大会とし、しかも2年続けて東北大会には出場できないという規定を設けた。しかしこの規定は1年で撤廃された。

ところが平成13年（2001年）から東日本学校吹奏楽大会が開催された。東北連盟も平成14年から中学校5団体、高等学校4団体を東日本大会に参加させることを決定した。

やがてこの大会が加盟団体に認知されると「A部門で全国大会を目指すよりも小編成部門で東日本大会という上位大会を目指す方が支部突破の確率が高い」という考えが広まり、部員数が50名を越えるような団体まで人数を絞って小編成部門に参加するようになった。

この状態に東北理事会では会議のあるごとに「小編成部門は少人数団体のために東日本大会設立以前から東北連盟で設定した部門である」と確認して、各県連盟に多人数団体が参加しないように指導を要請した。

しかし、その後も大きな改善が認められなかったので東北理事会では東北全体で実態調査を行うこととした。「中高全加盟団体の学年毎部員数調査」と「その部員数でどの部門に出場したか」の2点についてである。

「部員数調査」の結果をまとめたグラフから中学校は部員数30名から35名までの団体数が一番多く、高等学校では30名付近で大きなピークがひとつ、60名以上でも同規模のピークが見られるという二極化が判明した。

「どの部門に出場したか」という調査では、中学校では40名から60名以上の部員数でも小編成部門に参加している団体が多く見られたが、高等学校では部員数のグラフの山と同じように出場する部門の棲み分けが行われていることが判明した。

この調査に基づき東北理事会では「小編成部門に出場可能となる部員数制限の設け方」について3年の歳月を掛けて議論した。その結果、

①中学校小編成は25名以下、高等学校小編成は30名以下とする。

②前年度11月末現在の1・2年生部員数を一斉に調査する。

③中学校小編成に出場するにはその数が20名以内であること。

高等学校小編成に出場するにはその数が25名以内であること。

④12月の東北理事会で次年度小編成部門に参加できる団体を確定する。

⑤11月末の調査以降、人数の多かった団体でも転校や退部などで部員の減少が生じたときは各県理事長に部員数変更届を提出し、各県理事会で認められた場合のみ的小编成部門に出場できる。その事例は東北理事会に事後報告する。

と決定された。この理事会の決定に基づき、東北吹連では平成22年度からこの規定を適用し、現在に至っている。

ここまでの経緯は決して平坦なものではなかったが、支部の現状を正確に把握した上で議論を重ねたことにより、今後の少子化による部員数減少に伴う吹奏楽活動の停滞を少しでも食い止めることが出来たのではと考える。

なお、参考資料として「調査方法の資料」と「調査結果の資料」を掲載するのでご覧頂きたい。